

は徹底的に破壊され、砲爆の轟音と天に沖する黒煙の中に次第に廢墟となった。

撤収した我々は戰場掃除を終え、敵機の飛来する下で戦死者の腕等火葬に付し、遺骨を茶碗に納めて以後戦友を胸に抱きながら作戦を続けた。一中隊は四月十一日露营地を出発、十五日雲台山に進駐、警備していた第二十七大隊と交代した。以来毎日の如く陣地構築に専念した。対空、対砲火のための壕掘りである。山の中腹を掘削、その上に土を盛った。

四月二十九日天長節の日、歩、砲、飛、三位一体の敵による総反攻に会う。敵二個軍（四個師）敵機十八機を迎え討つ第一中隊は斎藤中隊長以下百五十人、死闘は早朝から数時間におよび、昼過ぎ我が主力軍の進出により攻撃を断念したようだ。その後、陣地に補修を加え、強固な陣地にした。

六月半ば浙川へ転進を命ぜられた。さらば恨み多き老河口よ、誰の胸にも、感慨深く暮れゆく老河口を見つめながら、静かに雲台の山を降りた。

衣師団の軍馬について

島根県 黒崎 敏夫

軍 歴

昭和十八年十月（濟南）

北支派遣軍第三十九師団（藤）病馬廠

昭和十九年十月（泰安） 独立歩兵第四十五大隊（衣）

昭和二十年三月（濟南） 第五十九師団（衣）獣医部

昭和二十年六月 陸軍獣医大尉

そ の 一

戦況も南方に拡大し、昭和十九年には関東軍の部隊が、ビルマ、比島等に移動を開始していく。

第五十九師団（衣師団）は北支、山東省、濟南を中心に駐屯していた。師団獣医部は、この南進部隊に馬糧、獣医資材の補給を担当したが、乾草（あわ藁）の集荷に大変苦労した。

濟南周辺も都市部を除き、八路軍の進攻が激しくな

り、前線部隊の分遣隊が襲撃されて全滅したり、撤収を余儀なくされたり、治安は次第に悪化していたので集荷は困難を極めた。

山東省政府にも日参して協力をお願いした結果、所定ギリギリの量を確保することが出来たが、移動部隊からの要求量は補給することが出来なかつた。残念だつたがひたすら、無事目的地に到着することを祈つた。

その二

衣師団の軍馬（日本馬）の不足が生じていた。さらに、新しい部隊の編成で兵員と共に、日本馬も供出され、その補充を支那馬の徴発によりなされていた。しかし、これも、昭和十八、十九年ごろは不可能で、部隊によつては、ラバ馬やロバ馬を繋養して戦力の維持に努めていたところもあつた。

衣師団の独立歩兵大隊には、機関銃中隊、歩兵砲中隊があり日本馬も繋畜していたが、眞に貴重な兵器であり、その損耗を防ぐため、討伐作戦には大隊長を始め、指揮官、通信班は支那馬を使って参加した。

昭和十九年の春、山東省の八路軍の掃討作戦が実施

され、旅団長を長とする部隊が編成された。部隊本部は指揮班、通信班、歩兵一個中隊、輜重隊等でできており、輜重隊は約六頭の支那馬を使い、中隊長以下日本兵は十名位で、馬の手綱を持つものは支那の政府軍兵士であつた。

部隊本部が夜露営中、八路軍の包圍攻撃を受けた。ちようど、すり鉢の底のような地に露営を張つていたため、四方の山より激しい銃撃にあつた。夜で何程の敵兵かわからぬが、とにかく、弾丸のある限り応戦せよとの命令があり、小生も輜重隊、馬等の保健のため同行していたので、ピストルで三〇発の弾丸を敵の方に撃つた。

旅団長戦死の報があり、全滅かと覚悟をきめたが、幸いに近隣にいた部隊が救援にきてくれたので全滅はまぬがれたが、旅団長以下十数名の戦死、日本馬四、五頭の死傷、輜重隊馬四十頭余の四散逃亡により、戦闘続行が不可能になり、中止して駐屯地に引揚げる結果となつた。

ここでも、多くの軍馬を失ふこととなり、今後の作

戦行動に支障をきたすこととなった。

その三

衣師団を始め、北支方面軍の軍馬も、新しい部隊の編成や、作戦により、ますます軍馬の減少がはなはだしく、部隊の編成や、作戦にも支障が出るようになってきた。

昭和十九年春、軍馬補充のため蒙古より、約四百頭の蒙古馬が送られてきて、衣師団病馬廠で一時繋留、検疫（鼻疽）の上、各部隊に配送することになった。

馬は、列車で約三十人位の蒙古兵が添乗して輸送されてきた。濟南駅より病馬廠に連行繋養したが、添乗兵は、五、六人を残して引き揚げ帰国した。残った添乗兵も、一週間位で帰国した。

検疫期間は地元の労力を雇い飼育管理したが、蒙古馬は、放牧から連れてきたもので調教は全然してなく、人が寄れば咬む、蹴る、頭絡を外して逃げ回る。この管理、取り扱いには大変な苦勞で、多数の怪我人を出した。

この時、蒙古兵の乗馬を始め、馬の取扱いの至極優

れていることを目の当りみて感服した。

検疫も命がけの仕事だった。若干の眞性馬の殺処分を行い、十数頭の疑陽性馬を残して各部隊に配属されて行った。この検疫期間は約一ヵ月位だった。配属された蒙古馬が速やかに従順になり、戦力になるよう祈ったものだ。

その四

衣師団を始め、北支方面軍は日本馬は貴重な兵器であり、戦力であったことはいままでもない。その日本馬が各馬部隊で一、二頭は悪癖があり、取り扱いがむずかしくてただ無為徒食しているものがいた。

この馬を調査してみたら、その七割が陰辜馬（牡で辜丸が体内にあったため、去勢が出来なかった馬）であった。病馬廠にも部隊より送られてきた陰辜馬がいたので、一か八かで陰辜の摘出手術をやることにした。四肢をつり上げて保定し、廠長を先頭に三名の獣医で行ったところ、経過がすこぶる順調で、約一ヵ月後には性質も温順になり、立派に使える軍馬となって部隊に帰っていった。

これにより衣師団の陰騭馬はもちろん北支軍にも知れて衣師団外の部隊からの依頼もあり、合わせて十五、六頭の手術を行い、全頭成功して戦力の増強に役立った。

その五

衣師団の通信隊、病馬廠は済南の郊外にあり、隣接して隼航空隊が駐屯していた。

昭和十九年暮ごろより米軍機（P51）の襲撃が始まり、航空機、鉄道、列車を目標に逐次その回数が増してきた。また、B29が済南上空を通過して北九州、満州の鞍山等の工業地帯の爆撃を行ったが、今日は九州か、満州か、済南上空の飛行方向で判断されたものだった。

このような戦況になり、通信隊、病馬廠の馬を守るため、防空壕の掘削が始まった。壕は深さ二メートル以上、幅三メートルぐらいの大きさで、七、八十頭分が必要だった。毎日、地元の苦力を四、五十名雇用して行ったが、運搬車両は藁のモッコを担ぐ手段で能率は上がらなかった。さらに午後になると苦力が腹が減って土砂が運べないという始末で、叱ろうが、叩こう

が、一向に効果がない。そこで馬糧の高梁を失敬して粉にさせ、饅頭を作って午後支給し工事を急がせた。出来上がってから五、六回の空襲を受け、廠長以下全員で退避したが、米機の目標は馬でなく損害はなかった。

昭和二十年春には隼航空隊の戦闘機も何処にか転戦し姿はなく、米軍機のなすがままのようだった。

日支事変・出征従軍記録

大阪府 若杉米一

昭和十四年八月三十日午後十一時三十分ころ「電報、電報」と呼ぶ声にて目を覚ます。何があったのだろうか、表に出て見ると、富山からの電報ですと手渡され、局員の方から「おめでとう」といわれ、はつと召集だと思った。局員の方に「御苦労様」と言っ受ける。

「ヨネイチ ショウシユウ ガ キタ スグカヘレ